



「いまが終いでも間に合っている」



稻城選恵 (1917~2014)

浄土真宗の法話はいつでも臨終法話です。蓮如さんは「仏法には明日といふことはあるまじき」と言われる。真宗の法話は臨終の法話だから、いまが終いでも間に合っている。明日にもいのちがない、それでも間に合うくらいに充分に間に合っているのが浄土真宗のみ教えです。

いつでも「いま」ということ。明日でも昨日でもない「いま」です。死んでからでもない。「いま」といったら、わしがいるところ。わしが、どこにいるか。わしがいるところが、助かる場所です。阿弥陀さんのお慈悲だから、この私の「助かる」が先に届いているんです。

「仏法には明日といふことはあるまじき」、いま助かる法ですからね。摂め取って決して捨てないぞという、阿弥陀さんの救いのよび声を「いま、ここで」聞くのです。

稻城選恵和上のご法話



親鸞聖人は、1173年5月21日(承安3年4月1日)、京都・日野の里でご誕生、9歳で得度(仏門に入り僧となること)された。比叡山で20年間修行されたが、迷いや苦悩から逃れることができなかった。そこで山を下り、六角堂での救世觀音の夢告により法然聖人の門弟となられ、専修念佛に出あられた。35歳の時、専修念佛停止によって越後に流罪となり、39歳で赦免の後、妻・惠信さまや家族とともに関東へ移り、約20年間布教を行われた。1224年(元仁元年)に主著『顕淨土真実教行証文類(教行信証)』を著された。その後、京都に帰り著述活動を行われ、1263年1月16日(弘長2年11月28日)、90歳でご往生された。

■報恩講の案内

の報恩講は

月 日 から

月 日 です

皆さまそろってお参りください



浄土真宗本願寺派
(西本願寺)

『出家学道』
比叡山での修行に励む親鸞聖人

まなざし 眼差しの中で

年をとれば、別れはつきものです。私も数年前に祖父母を亡くしました。祖父は厳しい人で、よく怒られました。

「ちゃんと挨拶しなさい」「綺麗に食べなさい」「勉強しなさい」。

亡くなるとそうした言葉をかけてもらえないなくなるのですが、ふとした時、祖父の言葉や顔を思い出すことがあります。

「こういうときのためにじいちゃんは言ってくれていたんだな」

「こんな態度ってたらじいちゃん怒かもな」

私たちは「生きている人」たちだけで暮らしているのではないようです。「亡くなった人」の言葉や思いを大切に思い、受け継ぎながら、「亡くなった人」が見ても恥ずかしくないように生きていこうと

しているのです。

けつ
私たちには決して一人ではないはずです。
生きている人はもちろん、亡くなった方も仏となり、さとりの世界から見まもってくださっています。「生きていく」とは、多くの「眼差しの中」で生かされていることなのです。



ぼうおんこう 報恩講とは

しんじつ
眞実のみ教えをお示しくださった親鸞聖人に感謝し、阿弥陀さまのお救いをあらためて心に深く味わわせていただく、一年でもっとも大切なご法要が、「報恩講」です。
「報恩講」という名称は、親鸞聖人のひ孫である本願寺第3代覚如上人が、親鸞聖人の33回忌にあわせて『報恩講私記』を著されたことに由来しています。

ほんじん
以来、700年を超える歴史の中で、先人たちが親鸞聖人ご命日の法要を「報恩講」として脈々と受け継ぎ、今日まで大切にお勤めしてきました。

じょうどしんじゅう
家庭での報恩講をお勤めするとともに、ぜひ一般寺院や本山、別院など全国の浄土真宗のお寺でお勤めされる報恩講に、お参りしましょう。

ほうおんこう
報恩講を機縁に、
しんらんしようにん
親鸞聖人のおこころを
より深く味わうために…



〈施本『報恩講』〉
毎年9月1日発行

1部100円+税 / 18.5cm×11cm・40頁
郵便でのお届けにも便利なスリムサイズです。

※「報恩講」の他、「お盆」「お彼岸・秋」「お彼岸・春」の施本も発行しております。ぜひお読みください。

施本のお問い合わせは、本願寺出版社まで

0120-464-583

FAX 075-341-7753